

Title	河合俊三君学位授与報告
Sub Title	
Author	河合, 俊三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1977
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.70, No.6 (1977. 12) ,p.700(120)- 701(121)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学位授与報告
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19771201-0120">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19771201-0120</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

なく、計量分析では判断の困難な問題の解明に成功したことは評価されるべき点である。また組合の企業別組織が持つ企業内の機能については、まだ理論的に十分展開されているとはいえないが、多くの注目すべき問題が指摘されている。その反面に、対象が民間大企業に限定され、また労使の企業内交渉における非公式的なプロセスの解明に重点が置かれながら、生産の現場における労使のビヘイビアの観察が十分実行されなかったことは、いずれも今後課題を残すものといわなければならない。しかし戦後日本の賃金決定に関する行動論的分析を、よくシステム的にまとめ上げた業績はたかく評価されるべきであり、経済学博士の称号を得るにふさわしいものと判定する。

論文審査担当者 主査 中鉢 正美  
副査 黒川 俊雄  
副査 佐野 陽子

## 河合俊三君学位授与報告

報告番号 乙第853号  
学位の種類 経済学博士  
授与の年月日 昭和51年9月30日  
学位論文題名 「戦後国際通貨体制の発展過程」

### 内容の要旨

#### 「戦後国際通貨体制の発展過程」論文要旨

河合俊三

国際通貨制度の改革はなお進行中であるが、この辺で戦後における国際通貨制度の発展過程を振り返ってみることが、今後の問題の所在を見極める上においても重要であるという観点から本論文を執筆した。かような必要を感じたのは、国際通貨問題の本質は歴史的な分析の方法をとらずには正確に把握できぬだけでなく、有効な国際通貨制度改革の提案も到底浮んでこないとの考えを深めるに至ったためである。従って、研究を進めるに当たっても、あらかじめ設定された概念のフレームワークの中で現実に生じた問題の位置付けをしたり結論を急ぐということをせずに、まず国際通貨問題をめぐる主要国間の論議の真意と背景を、できるだけ詳細かつ正確に把握することから出発した。かようなアプローチの過程において発見した一つの事実は、

従来のわが国の国際通貨問題に対する認識および通貨当局の対応振りが著しく米国寄りなことで、こうした偏向を是正する目的意識のもとに、欧州大陸諸国の主張や貨幣観に対しても注意を怠らぬよう努めた。

第一章では、ブレトンウッズ体制の成立から崩壊に至るまでの過程を重大な国際通貨情勢の変化との関連において分析したが、結論としては、戦後の国際通貨体制が、1930年代に全く機能の麻痺するに至った金為替本位制度の欠陥を十分払拭せずに継承したことに、今日の国際通貨危機を招いた根本的原因があるといえる。ブレトンウッズ体制がドルの金交換停止によって崩壊に追い込まれたのは当然の成り行きであったとはいえ、将来の金の処遇に関してはまだ主要国間に完全な合意が成立したとみられぬことを、第二章において論じた。第三章においては、ブレトンウッズ体制の動揺に伴って表面化してきた国際通貨制度の分極化傾向をECの通貨統合の動きを通じて分析したが、通貨統合の理想と現実の乖離は、最近二、三年来かえって拡大しつつあり、EC通貨の共通の価値基準さえ設定に程遠き状態であるといえる。

### 論文審査の要旨

(一)

本論文は、第一章ブレトン・ウッズ体制の崩壊過程、第二章戦後における金問題の発展、第三章EEC通貨統合の回顧と展望とからなり、この三つの点から戦後の国際通貨体制に関する視点を定めている。

(二)

分析方法として機能的に把えることを行わず、歴史的方法を用いている。これは筆者の本論文における方法論、または方法論上の哲学を示している。すなわち、戦後の通貨体制は一つの概念のフレーム・ワークで把えることができず、社会経済的——それも国際的広がりをもつ——に考慮されなければならないとする哲学に根拠をもつ。

(三)

第一章では、戦前の国際通貨体制の欠陥を反省して、戦後の国際貿易を円滑ならしめるように、IMF(ブレトン・ウッズ体制)を設立したが、戦後の国際経済は予想以上に、深刻かつ大規模であったために、IMFは決済機構の中心的役割を演ずることができず、米国の一方的ドル供給装置(例えばマーシャル・プラン)に頼らざるをえなかった。このために欧州地域内での通貨の地域化を推進させた、すなわち地域的解決の方向にい

く土壌があった。これを筆者は米国の観点と欧州の観点の相違、歴史上の背景の相違として、通貨外交的解決を前面に押出した。これが歴史的方法をとろうとした筆者の史観とも結びついている。しかし、大切なことは国際通貨のフレーム・ワークという経済学的メカニズムがなお存在することも考えるべきではなかったか。意見を異にするひとびとの論争を産むところである。この点が河合氏の主張の一つの根底をなすことも事実である。

(四)

ドル為替本位制に対する不安として、金の二重価格制、SDR の創設はすべて欧州側の通貨観、米国の通貨観の相違が、合意による解決として歴史的な結果を産むにいたったことを力説し、全体的な理論的解決として出現したのではないことを主張されている。すべての解決策が恒常的性格をもつものではないことを指摘されている。ここにも歴史的表现としての国際通貨体制のありのままの姿を示す。

(四)

国際通貨体制のフロート移行に対して、変動為替相場制についての全幅の信頼をおくことができず、国際通貨体制としてなお固定為替相場のもつ利点を主張されている。しかし残念なことに、金為替本位という形をとった固定為替相場が崩壊したことは、必ずしもすべての固定為替制の否定にはならないと主張されているが、別な形の固定為替制が提示されていないことである。金為替制の形は歴史的にくずれたのも事実である。すべての制度が完全でないことは、すべての人の認めるところである。制度が意味をもつのは、欠陥が利点にくらべて相対的に無視しうる程度であり、その制度がよく work する条件があれば、それはよい制度である。確かに、固定為替制は多くの利点をもつことは氏の指摘するとおりであり、フロート制が必ずしも、期待した程よく work していないのも指摘のとおりである。現在のわれわれはフロート制しかない。金為替本位制には戻れないということである。氏に対して、氏の主張する固定為替制の現実的な代案を求めることができればよいのだが、これは現段階では「ないものねだり」にしかすぎないことも事実である。

しかし、河合氏が欧州の見方から、国際通貨体制をみたことは、現在の論調の大部分がアメリカ中心であることをみれば、まさに貴重な一主張であり貢献と考えられる。

(六)

金問題について金に焦点をあわせ、第一章の主張を強化されている。ここにも欧州における金選好の根拠を、ドル為替本位制に対する不安の排除にしていることは、一つのすぐれた見方である。

(六)

EEC通貨統合も混乱する国際通貨体制にたいする地域的解決として把え、これが又、欧州対米国という視点からみられておる。通常EEC通貨統合は世界通貨への系譜の中で論ぜられているのを、国際通貨体制の混乱の中での部分的解決としてみる見方はユニークなものである。

(六)

本論文の構成上、ブレトン・ウッズ崩壊から出発するのは、本論文の目的上無理のないことであるが、崩壊は必ず設立と関連する。存在しないものに崩壊はない。すると論理上存在の条件、設立の環境が先にあった方がよかったのではないかと、というような、論文構成上の意見の相違もでてくる。

(六)

以上、われわれは河合氏の主張、構成、展開について異なった主張をなしたが、氏が主張する欧州的な通貨体制の見方、および通貨外交の歴史的発展をたんねんに追われ、通貨問題を社会経済的に把え、そこには歴史性の存することを主張されたことに深い敬意を払うとともに、その貢献を評価し、本論文が学位に値するものと判定する。

論文審査担当者	主査	村井	俊雄
	副査	白石	孝
	副査	村野	孝
学力確認	英語	千種	義人
	独語	山本	登